氏　名	緒方誠人（おがた まさひと）
学位(専攻分野)	博　士　（学　術）
学位記番号	博　甲　第　49　号
学位授与の日付	平成 6 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科機能科学専攻
学位論文題目	都市空間におけるアーバンサインシステム形成に関する基礎的研究
審査委員	(主査) 教授 材野博司
	教授 池田有隣　教授 中野正大　教授 古山正雄

論文内容の要旨

近年、都市はますます巨大化し、空間の複雑化に加えて、都市空間の記憶を呼び起こす歴史的建造物を初めとするシンボル的施設の消失が加速進行しつつある。その結果として都市空間構造と人間行動のスムーズな対応が困難となり都市における人間行動のレジビリティが失われがちとなっている。

この様な状況を解消するためには、都市空間と人間行動・感性との対応に支障をきたす要因を取り除き、両者のコミュニケーションの回復をはかるとともに、都市空間のレジビリティの確保をはかることが、都市アメニティ形成の重要な課題となりつつある。

都市空間のレジビリティは、都市構造そのもので確保していくことが本来の方向であるが、それが現実に困難な状況下においては、空間構造を象徴的に表し、人間行動の手がかりとなるサインシステムの充実により補足していくことが必要と考えられる。

しかし、現在実施されている標識等によるサイン表示では、複雑で巨大な都市空間にレジビリティを賦与することは不可能であり、かつ周辺の景観に対して異質であるとともに、人間の美的感性に対する配慮も殆ど見られない。

そこで、多様で一見わかり難く感じられるなど、都市環境のアメニティ形成上の問題を有する都市空間の中から、それが深層として持つ枠組みを象徴するとともに、人間行動と融合をはかるシンボル性の高い要素を抽出し、それを形象へと遷移させることによって、サイン化をはかり、サインのネットワークも含めたサインシステムを探ることにより、都市空間における人間行動のレジビリティを確保することが、本研究論文の目的である。

この研究を進めるために、本論においてはまず「空間サイン」の種類を確認し、その機能と効用を把握するとともに、人間行動との関係を、「サイン」が持つ「伝達作用」と「認識作用」の２側面から検討している。すなわち、伝達作用に関わる情報の送り手としての発信側の提供情報と、認識作用に関わる情報の受け手としての、受信側の行動情報の両側面から研究を進めている。

第１部の「提供情報と都市構造の関係」においては、都市内における目的地到達のための行動において、どのような情報が提供されているかを探るために、提供情報として一般に常用されている案内情報の調査・分析を行っている。

この結果から、空間特性の相違により情報の種類や量が変化するとともに、案内情報の相違によって、情報として作用する範囲や距離が変化することを明らかにしている。また、これをもとに行ったプロセス情報調査では、プロセス段階で提供される情報の種類は、予測される行動の各段階で変化させて提供されていることを、証明している。次に、提供情報が行動においてどの程度機能しているかを把握するために、

案内情報で提供された施設のサインとしての利用状況を調査した結果、施設業態により微小の相違はあるものの、提供情報との相関が高いことを証明している。

第２部の「行動情報と都市行動」においては、都市空間の形態及びサインの配置状況と人間行動との対応関係を、目的地到達のための情報行動から調査・分析している。

まず、サイン配置と目的地到達との関わりについては、サイン配置位置や密度が到達可能範囲に大きく影響を与えているとともに、対象地区の空間特性によっても到達範囲が変化することを明らかにしている。

次に、サインを手がかりとする歩行行動と空間特性の関係を把握するため、歩行行動観察調査では、歩行者が経路選択時に利用する情報量に関しては、サイン情報行動量は経路選択肢の数と相関して増加すること、空間特性により利用するサイン情報の種類が変化することを明示している。さらに、到着点におけるサイン記憶調査から、サイン情報行動調査で明確化されにくい側面について検討を行い、前記調査結果の検証を行うとともに、都市構造によりサイン利用行動が異なる点を明らかにしている。

第３部「結論」においては、これらの研究結果をもとに、都市におけるサインシステム（アーバンサインシステム）形成を目指しての課題について整理するとともに今後のアーバンサインシステム形成のための基礎的提案を行っている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、都市空間におけるレジビリティ確保が困難となりつつある近年において都市空間構造を象徴的に代替させ、都市空間のレジビリティを補完するアーバンサインシステムについて研究したものであり、環境デザイン分野における時代的要請に合ったものであると認められる。

この種の研究は、環境デザイン分野は勿論、ランドスケープ、都市計画においても殆ど進められておらず、土木工学分野において自動車交通での安全性の側面と、交通工学とデザイン分野の地下空間での避難の側面で、実務的研究がみられるのが主であり、都市環境のアメニティ向上という側面からみたサイン研究としては先駆的と言える。

本研究の特色は、サインシステムを都市空間のアメニティ形成計画との関連で把握している、サインシステムを都市空間構造の象徴的代替要素に位置づけるための手がかりを探求している、サイン情報の抽出を空間に対応する瞬時的な人間行動にベースを置きながらも、その経路軌跡の分析も併用している、サインシステムを受信側の情報抽出行動に主眼を置きつつ、発信側の提供情報との関係で検討している、対象空間を、実在の広義の都市空間でありながら、サイン情報以外の情報が少ない特定な空間に限定することによって、純粋サイン行動情報の抽出に成功している。

本論文は論理的にまとめられており、理論の展開方法も明確であるとともに、調査方法、分析の手法とそのプロセスも適切と認められる。都市空間のアメニティ環境形成とそのレジビリティ環境整備の両面において、きわめて有効な結論が得られており、今後の都市環境デザイン計画に寄与するものと評価される。

最後に、学位論文の基礎となった学術論文は、日本都市計画学会の論文集２編をはじめ、日本建築学会の４編（内２編は審査中）、参考論文は同じ日本建築学会の大会講演梗概集数編があり、博士の学位授与に充分値するものと認められる。